



TITLE:

現代大量生産体制論 - その成立史的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

塩見, 治人

CITATION:

塩見, 治人. 現代大量生産体制論 - その成立史的研究. 京都大学, 1980, 経済学博士

ISSUE DATE:

1980-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/222496>

RIGHT:

氏名	塩見治人 しお み はる ひと
学位の種類	経済学博士
学位記番号	論経博第47号
学位授与の日付	昭和55年3月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	現代大量生産体制論 —その成立史的研究—

論文調査委員 (主査) 教授 高寺貞男 教授 降旗武彦 教授 前川嘉一

論文内容の要旨

本書は、現代巨大企業の生産過程に広範にみられる大量生産体制について、その歴史的起点を産業革命期に出現した工場に求めて、成立過程を解明した実証的研究である。

この場合、これまでの研究史は、現代巨大企業と19世紀の企業の生産過程における質的格差に対する問題意識が希薄で、極めて抽象的に処理していた点をふまえて、(1)現代巨大企業の生産過程が19世紀の企業のそれを原理的に変革した独自性をもつこと、また(2)前時代から飛躍性のみが強調されてきた19世紀の工場も今日の視点からは多くの歴史的制約性をもつこと、に関して明確な内容規定を与え、生産過程における両者の段階的差異についての論理的な整理をおこなうことが、特に意図されている。

以上の問題を、本書では、大量生産体制成立史において最も困難な技術的・組織的な問題解決に直面した機械工業を対象として、それぞれの時期を画した代表的企業の工場の内部構造(作業機構と管理機構から構成される生産システム)を確定し、それらを発展史として配列することによって、成立過程を把握する方法がとられている。そのため、本書は原基形態としての産業革命期の工場(第2章)が、19世紀中葉のアメリカン・システム(第3章)と19世紀末葉のアメリカ管理運動(第4章)という2つの媒介的要因を統合することによって、20世紀初頭のフォード・システム(第5章)に発展する3部構成をとっている。

第2章は、原基形態としての工場の歴史的制約性の確定に力点がおかれている。それは、ひろく援用されてきたユアやマルクスの工場概念が当時の最もすすんだ紡績工場をモデルに構成されたものであり、19世紀の諸産業部門に出現した工場を説明するのに有効でなく、また今日の工場へと転化していく糸口と方法を欠いた一般的・抽象的な概念であるためである。本書は、ボウルトン=ワットの工場で工場概念の具体化をはかり、作業の機械化は直ちに熟練を消滅させたのではなく、ひとまず伝統的手工的熟練を機械的熟練に転化する役割を果たしたとの認識を基礎に、19世紀の基幹職種を担当する主労働者が、汎用的な半自動機械に規定された機械運転作業の主体、さらに低位な作業組織に規定されて多様な加工対象と正規外間接作業をも分担する主体としての熟練工であること、一方この多様な作業内容の一部が助手に分担されて派生的な補助職種が成立し、基幹職種——補助職種からなる組作業が作業単位となることが示される。

この熟練工が同時に作業単位の運営に関する一切の職務遂行の主体であったから、作業単位は自立的な管理単位＝「職長帝国」となり、こうして、19世紀の工場管理機構はその末端で作業機能と管理機能がゆ着した工場長——熟練工という簡単なライン組織で編成され、工場管理とは「職長帝国」による職場管理の集合＝間接・分散管理となっていることが確定されている。

第3章は、互換性生産方式を確立したアメリカン・システムが、19世紀の工場の作業機構に対する革新の歴史的画期となったことが説明されている。「作業の細分割」「職種の多様化」「作業の客観化」など従来の抽象的な認識に、本書ではニューイングランドの銃器工場の分析によって、多様な専門的な自動機械の出現とこれらの品種別機械加工ラインへの統合、これを土台とする品種別職場作業組織の成立という内容規定が与えられている。

第4章では、アメリカ管理運動は「職長帝国」への体系的な挑戦であったとし、19世紀の簡単なライン組織による管理機構がラインスタッフ管理組織にもとづくそれへと変革される歴史的画期となったことが、説明されている。本書は、テイラー・システムの機能別職長制度を機能別組織にひきよせて評価する従来の見解を否定し、テイラー化された工場の管理機構の分析から、それが「職長帝国」に内包された作業方法の設定機能を分離して集中処理し、これを前提として工場全体の諸作業を工程計画（手順計画・日程計画）で調整・統合する工程管理機構の提起であったことを確定し、機能別職長制度にライン＝スタッフ組織との評価を与えている。テイラー・システムは、個々の作業の計画・統制機能を集中処理するスタッフ部門を創出し、間接・分散管理を集中管理に転化することになったと位置づけられている。

総括的な位置を含める第5章は、フォード社のハイランド・パーク工場、リバー・ルージュ工場によってフォード・システムの生産力構造が説明され、原理的にはほぼ今日の大量生産体制をなすものとしての評価が与えられている。まず、フォード・システムの流れ作業機構は、個別に独立して開発され個々の工場に散在していた19世紀のアメリカ工業史の遺産をコンペアによって統合したものであることが強調されている。さらに、約1分の短い作業タクトで進行する生産ラインが相互に自立的であり、このため個々の生産ラインを全体的に調整・統合する本格的なライン＝スタッフ管理機構が成立していることが示され、流れ作業＝同時管理＝簡単なライン組織による管理という通説的理解が否定されている。最後に、規模的側面が考察され、流れ作業機構が要請する「部門化」・垂直的統合は、異種工場の強固な結合を創出し、生産単位の変革＝19世紀の工場の工場結合体への規模拡大となることが指摘されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、大量生産体制を作業労働と管理労働の両面における労働組織・労働力構成・労働手段体系の6つのサブシステムから構成される生産システムとしてとらえ、その機械工業における代表事例として始点（ボウルトン＝ワットのソーホー鋳造工場）と到達点（フォードのハイランド・パーク工場とリバー・ルージュ工場）との間を「アメリカン・システム」の銃器工場とアメリカ管理運動とを媒介にして、機械工業における大量生産体制の成立史を発展序列にそって無理なく構成した点で、これまでの研究水準を工場（管理）レベルへ引き上げるといふ貢献をなしている。

その意味で、本論文は大量生産体制の成立史の研究に画期をなした業績であるが、つぎに指摘するよう

な重要な問題が残されている。

(1) 本論文では、フォード・システムを現代大量生産体制の到達点として位置づけているが、フォード・システムは「現代」の始点にすぎないという見方からすれば、T型に固執した単品生産体制にたいし製品差別化政策にもとづくフル・ライン体制をとって、フォーディズムを圧倒したGMの事業部制の方を「現代」の典型としてとらえねばならないであろう。このことは、大量生産体制の分析視座を工場（管理）レベルにとどめることなく、さらに企業（管理）レベルへ引き上げて、その成立史へ射程する必要があることを意味している。

(2) 本論文は大量生産体制を組立生産（アセンブリング・ライン）組織に限定し、その結果として代表事例を機械工業にとっているが、大量生産体制には分解生産（ディスアセンブリング・ライン）組織も含まれているから、その代表事例として、精肉業・精油業等を取り上げるべきであろう。そうすれば、大量生産体制と寡占企業体制の成立史が相関的にとらえられるばかりでなく、さらに機械工業における大量生産体制を大量生産体制一般の特殊規定にまで高めることができたはずである。

こうした限界にもかかわらず、本論文は歴史的射程の長さとその実証の詳しさにおいて旧来の研究水準をはるかに抜きこんでいる。

よって、本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。